連載

熱海市立図書館 100年のあゆみ

第6回 「文化会館」と「熱海市立図書館」の誕生

問い合わせ：熱海市立図書館 ☎0557(86)6591

市制30周年を迎えた昭和42年4月、歴史を刻む旧御用邸の跡地に文化会館が建設されました。熱海市民の文化の殿堂となるこの会館は、地下1階地上3階の建物で、1階には会議室や結婚式場、2階には講演会や展示会が開催できるホールなどが設けられました。この文化会館の3階と中3階に待望の図書館が誕生したのです。

蔵書数4万5981冊となった図書館は、「熱海市立図書館」と改称され、閲覧室や児童室、資料室、書庫や事務室が完備されました。

新しい図書館では、吹き抜けの広い閲覧室でゆったりと新聞や雑誌を読む市民や、歴史資料を探す利用者の姿が見受けられました。

児童室には市内の小学生が描いた絵を織り込んで制作された臙脂(えんじ)色のカーペットが敷かれ、好みの絵本を手に取る子どもや親子連れの姿もありました。

資料室が設けられたことにより、熱海の歴史を学ぼうとする市民も増え、新しい図書館では市民と資料を結ぶレファレンス業務も積極的に行われるようになりました。

初めて完備された吹き抜けの閲覧室で楽しむ様子

市の中心部にある図書館。児童室はできたけれど、南北に市域の広い熱海では子どもが図書館に来るのは大変です。そこで考えられたのが「出前図書館」の発想です。昭和46年から始まった「こども一日図書館」は、伊豆山仲道公会堂（第1日曜日）と網代公民館（第2日曜日）を会場にして開館され、絵本やおとぎ話などを借りる子どもたちで貸出係は大忙し、登録した子が100人にもなったといいます。

この頃には、「目の不自由な人たちにも読書を」と、点字図書を18冊揃え、利用を呼び掛けました。さらに、昭和50年代に入ると、小説や落語が吹き込まれた「テープ読書」の設置や大活字本の導入も進み、視覚障がい者の皆さんへの対応も大きく広がりました。

また、昭和50年代には、8ミリフィルムによるフィルムライブラリーも順次配備され、子どもたちは身近に映像を楽しむことができるようになりました。

宇宙戦艦ヤマト・鶴の恩返し・名犬ラッシー・ナイチンゲールなどの名作8ミリフィルムが、子ども会や保育園、各団体に貸し出され、目を輝かせて見入る子どもたちの姿がありました。

目を輝かせて楽しんだ8ミリフィルム

市長メッセージ93

戦後70年

熱海市長　齊藤　栄

今年は日本が敗戦してから、ちょうど70年目に当たります。例年以上に、先の大戦に思いをめぐらす機会があったように思います。

先日、人間魚雷「海龍(かいりゅう)」が下田港沖の海底で新たに見つかったという新聞記事を読みました。過去に熱海市網代の沖でも海龍が発見されたことがあります。太平洋戦争の末期、米艦隊が東京に来襲することを想定し、伊豆半島を前線基地化する構想があったのだそうです。終戦により、海龍は実戦に大規模には投入されませんでしたが、もし本土決戦になっていたら、この伊豆で多くの若者が特攻隊員として命を散らしていたかもしれません。

また、熱海市のある人から、子どもの頃、市内で米軍の戦闘機に追いかけられ本当に恐ろしい思いをした、操縦士の顔がはっきり見えたという話を聞いたことがあります。

私の妻の母親は二十歳の時に外地で終戦を迎えました。妻が幼少の頃から、折に触れて機銃掃射や引き揚げの話をしたそうです。妻にとって戦争の記憶は自分の母親からごく自然に受け継いだものです。一方、私の両親はもっと下の世代のため、両親の戦争体験については大変ひもじい思いをしたこと以外はあまり聞いたことがありません。このため、戦争中にどのようなことが行われていたのか、そして、なぜこの戦争が起き、なぜもっと早く終結できなかったのかについて私自身が自分の言葉で語れるように、先の大戦に対する理解を意識して深めていかねばならないと考えています。

戦争を知らない世代の皆さんにも、戦後70年の節目に「戦争の悲惨さ」「平和の尊さ」について今一度考えていただきたいものです。

齊藤市長　本音トーク　毎月最終水曜日午後2時～3時、FM熱海湯河原(79.6MHz)で放送中！（再放送は翌日木曜日午後8時～9時）